
風が吹けば桶屋が儲かる？

カガツミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風が吹けば桶屋が儲かる？

【Nコード】

N9130S

【作者名】

カガツミ

【あらすじ】

かなり昔の投稿したもの。実はポケモンがほとんど出てこない寓話

今日はテストが終わって数日後のテスト返して教科は地理だ。すべての答えの確認と採点間違いの報告が終わってもまだ時間は十分ほど余っていた。

「さて、皆。時間が思いつき余った者でな、ここで質問なんだが…… お前ら風が吹けば桶屋が儲かるという言葉を知っているかい？ はい、知っている人は拳手！」

この海老沼という名の教師。時間が余ったからと言って地理の時間に国語か経済の授業でもやるつもりなのだろうか。

まあ、後者なら社会関係と言う事であながち脱線もしていないだろう。

手を上げるのは、俺の他に数人だ。結構有名な話だけれど落語に興味があれば知らない奴も多いだろう。

「まあ、このお話はな…… 大風で土ぼこりが立つと土ぼこりが目に入って、盲人…… つまり目の見えない人が増える。

当時、三味線は盲人がホウエン地方のオルドン家物語なんか語ることで日銭を得るためにな…… 話しの合間にベベンツ と弾くために三味線を買う必要があつたんだ。

しかし、その三味線にはエネコロロの革が必要でな。そのために何匹ものエネコロロが殺された。そして、エネコ・エネコロロが減ればラッタやコラッタが増え、それらは桶をかじる。

桶の需要が増え桶屋が儲かる…… という話なんだ」

へえ、と如何にもつまらなそうな言葉だけが返ってくる。ま、当然だろう。みんなテストの結果に一喜一憂するのに忙しいのだから。

俺みたいに大体の教科が平均点より四点か五点上ならそれほど問題じゃないけれどな。

「なんだみんな。興味ないって顔だな……よし、それじゃあ本題だ……似たような話で地理の先生らしいお話をしてやるぞ。

よく聞け、寝るなよ、耳の穴かつぼじれ。これはとある砂漠の国の物語。あの、ミュウが初めて発見されたといわれる南アメリカのお話である……ベベンツ」

三味線の音を口で言い表す海老沼先生。これでも海老沼先生のお話は面白いから、最後まで聞くことになるのがいつもの授業風景である。

昔々、とある砂漠の国がありました。その砂漠の国は毎日のようにサンサンと晴れています。その原因となるのが、グラードンというその国に神話として伝わるポケモンでした。

溶岩のように赤い体色に、ところどころ火山岩のような黒色のラインが走り、その腕にはアンノーン文字でマグマを象徴するMの字のラインが刻み込まれている。

前屈みな上半身を支えるような尻尾は案外短い、肉厚で幅の広いそれは巨体を支えるに十分足るものだ。

大人の身長倍以上あるうかと言うその巨体が吼えるとともに、周囲の天候は日照りとなる。

誰かが言った。雨が降らないのはこのポケモンのせいであると。そして、その言葉はどんどん広がっていき……やがては大合唱のように不満は募る。

雨が降らないのはグライードンのせいだあ！

野菜が不作なのはグライードンのせいだあ！

地震で建物が崩れるのもグライードンのせいだあ！

俺が結婚できないのもグライードンのせいだあ！

あることないこと、叫ばれて、ついにはグライードンを討伐するという者まで現れ始めた。国の勇者は当時一般的な武器とされてきた弓と槍を取り、数人で力を合わせてグライードンを撃退した。

「お前ら、後悔するからなあ！」

グライードンは去り際そんなことを言いながら砂漠を出て行ったが、国の民衆たちはそんなことを何ら気にせず平和に暮らしました。と、そんなところで話が平和に終われるはずもない。

国には雨が以前よりも降らなくなり、オアシスも枯れて人々の生活はさらに厳しいものとなってしまったのだ。今までの『雲一つ無い晴天』が『雲が数個ある晴天』に変わっただけで、雨はむしろ少ないという煮え切らない結果である。

グライードンの呪いなのか何なのか、国では原因が分からないあまり、雨がさらに降らなくなったのは勇者のせいであるという結論にまで達しそうになる。

グライードンは勇者に対して怒っておられるのだ。

勇者達を血祭りに上げる！

もちろん、『まあまあ冷静に』という声も多かったが、作物が栽培出来ないことで食糧不足による餓死者が例年の倍以上となつては流石に抑えきれない。

仕方がないから勇者たちは雨を降らすという力を持つ伝説のポケモン、カイオーガを呼び寄せて雨を降らそうという結論に達した。

そうして、苦勞の果てにカイオーガを砂漠の国の海岸に招きいれ、雨を降らすように頼んだ。

そのカイオーガの力はすさまじく、頼めばいつでも雨が降る。

「ああ、カイオーガ様ありがとうございます。これからは雨が必要となった時は、貴方のために祭りを開いて歓迎します故、これからもこの海辺を泳いで居てくださいませ」

砂漠の国を代表する王は言った。

「ああ、だけれど国を治める者がそんなに自分勝手にええのかい？」
カイオーガは、そう言ったが、意味が分からず王は首を振る。

「いや、これは国の総意であるから」

そうして、この国はいつでも好きな時に雨が降る国となった……
あくまでこの国は。

反面、隣国では全く雨が降らなくなってしまったという。

「はい、ここで皆にお勉強だ。この世界にはポケモンの力に頼らずとも雨を降らす方法があるのだが……みんなはどうすればいいと思う？」

はい、その一！

空に愛をばら撒いて、その熱いLOVEパワーで雨を降らせる。

その二！

空に友情を……以下略

その三！

空に悲しみをばら撒いて、涙雨を降らせる

その四！

空に怒りをばら撒いて、台風を起こす。

はいみんな、どれだかわかった奴は拳手！」

俺は思わず笑ってしまった。それでも俺は雑学知識だけは無駄に多いんだと、誰もが拳手しない中で俺だけが手を上げる。

「お、よし桜井。答えてみる、何番だ？」

「一番……特に年齢の高い熟年の愛のほうか雨もよく降ると思います」

ほほう、と海老沼先生は感心したように頷く。

「だいぶ賢い奴がいるなあ、このクラスは。そうだ、空に愛をばら撒くと雨が降る……と言っても、ただの愛じゃダメなんだ。

実は愛って言うのはな……でんぷんを紫にしたり、うがい薬に使ったりするヨウ素の元素記号『I』のことであり……こいつを銀と化合させて作ったヨウ化銀というモノをばら撒くと、それが雨の核となって雲が発生するために雨降らすんだ。

ちなみに、桜井が年齢の高い熟年と言ったのはな……年齢のことを英語で『Age』と言い、銀の元素記号が『Ag』だからだ。そうだな？」

「ん、まあそう言う事です」

当たり障りのない返答をしながら、俺は注目されることに微妙に照れていた。

「他にもドライアイスを空中にばら撒くことでも同じようなことが出来るという事も覚えておけ。得はあんまりないだろうけれど、覚えておいて損はないだろうから」

ぽつりぽつり、笑いのツボの弱い奴らから失笑が漏れた。俺も少しおかしい。海老沼先生の授業はこれだから人気がある。

「さて、ここでお話に戻るぞ。ハウエン地方ではお天気居研究所カイオーガがどのように雨を降らせるのかの、メカニズムを研究しているがいまだに明らかになっていない。

だが、重要なのはそこでは無い。興味深いのはヨウ化銀を使った時と同じ症状になったという事はこの伝説に伝わっているという事だ。

ヨウ化銀で雨を降らせると偏西風で運ばれていくはずの湿った空気が、そこですべて乾燥してしまうんだ。つまり、そこから東は雨が降らなくなる。

逆にそれを利用して、オリンピックの前日に雨を降らせて乾燥させるなんて言うのは記憶に新しいな？

さて、このお話では、続きに雨をめぐって戦争まで起きそうになってしまい、いつしか誰かが『カイオーガに次々移動して雨を降らせてもらえばいいんだ』と言うようになったんだ。

だが……カイオーガ『は勘弁してくれ、ワシはもう旅なんてせず一つの場所でのんびりしたいんじや。それにそんなことやってたらキリがなくなつて、結局大陸の端から端までいかにやらんじやろっ』と言ったんだ。

つまり、木村王国が潤うと兎玉王国が乾燥する。兎玉王国を何とか潤わせると坂田王国、坂田王国の次は桜井王国。ああ、腕が疲れる、キリがない」

右から二番目の机の列に座る生徒の頭上で、指を広げたまま素早く手を上下させることで雨が振っているようなジェスチャーをされる。それで、腕が疲れるのだろう。

何故か俺を含むその列の生徒は国の王様にされてしまい、クラスの所々で吹き出してしまう海老沼先生の授業のいつものパターンに入っている。

「ま、これはそう。我田引水つてことわざと似ているな……これをどうやって解決したのか？　続きが始まり始まり」

「一か所で定住したいかあ……それじゃあいったいどうすれば」

結局、カイオーガにそれ以上頼むことも出来ず、王様は途方に暮れていた。するとカイオーガは言う。

「この国が砂漠になる原因はのう……北の地方からここに寒流が流れ込んでおるせいなんじゃ。こんな冷たい水じゃ雨がなかなか蒸発せんでのう……ま、この海流をどうにか出来る者があるとすればルギアの若造くらいかの。ほっほ」

なるほどそれだ。と、グランドンを撃退したり、カイオーガを招き入れた勇者たちに王様は頼んだ。勇者もなんだか半ば自棄になつて旅に出て、苦勞の末にルギアのいる中央アメリカにまで到達した。

しかし、ルギアは言うのだ。

「出来るには出来る……だが、それをやってしまうと、住む魚、回遊する魚そう言った者がすべて変わるとともに、他国との交易船の行き来に使う潮の流れを変えてしまえば貿易にも支障が出るだろう。例えば、難破したり遭難したり、目的地に正しくたどり着けなかつたりで貿易が滞つてしまえば……工芸品との取引で穀物を輸入している国なら大打撃を受けるだろう。」

それに、海に住むポケモンを含む生物にどのような影響が出るかも分からん。そんな危なっかしいことは出来ない」

ルギアはそう言つて、勇者達を突っぱねる。

勇者は早速このことを王様に相談した。実は王様、特に大臣諸侯

たちに相談することもなく勇者を派遣していたので、事の重大性を理解していなかった。

ルギアに言われたことを、王様が皆に伝えたと漁師を始めとする船乗りの総好かんをくらい、王様はルギアに頼るという手までも封じられてしまった。

ほとほと困ってしまった王様やその国の学者達は、雨を降らせるにはどうすればいいのかと考えに考えた末、結局何も思いうかばない。

結局のところルギアに良い案がないかと、相談持ちかけることにしたわけで、今度は勇者たちに頼るだけでなく、学者も一緒になって食料を多く持ち、長い間語り合える準備を万全にしている。

そんな語り合いの中でまず最初にルギアが出した案は、神の力に頼ることなく自身で出来ることを最初にやってみるという事であった。

「だが、まあ。その神の力の恩恵に頼りたくなる気持ちもよく分かる。だから私はお前たちの願いを一度だけかなえよう。

だが、神が手を貸すのは一度きりだとすれば、どんな頼みをすれば良いか、自分で考えてみるとよい。

そして、もうひとつ。自然を司る者の力を敬うがよい。自然をつかさどる者の力は偉大にして尊いものだ。グラードンは砂漠に邪魔な神では無いと、心に刻め、話はそれからだ」

そう言ってルギアはひとまず王様たちを。国へと返した。

国へと帰る帰路の途中、グラードンの捨て台詞として皆が一笑に付した言葉を思い出す。

『お前ら後悔するからなあ！』

粗暴で、幼稚な言葉遣いだけにあまり尊敬は得られなかったけれど、グライードンはこのことが分かっていたのだろうか。

長丁場の話し合いになることを想定して船に積みこんだ食料は、そのままグライードンへの供物として差し出された。

「教えてくれ、グライードン」

王様は跪きながらグライードンへと尋ねる。

「何ゆえに、貴方がいなくなることこの国は余計に水不足に苦しむことになったのだ？」

大きい体のせいか、非常にゆっくりとした動作でグライードンは顔をあげ、語り始めた。

「太陽の力なくしては温度の変化は起きない。それは即ち風は起きないという事だ。無論のこと、俺に太陽をどうこうする力はないが…… 陸地へ強い日差しを届けるように、海へ強い日差しを届けて空気を暖めることもある。

お前らがカイオーガに頼んで雨を降らせた時、それより東は雨が降らなかったのであらう？ 同様に、寒流の手前の海上でばかり雨が降っていたらどうなる？

ここには雨が降らないという事になる。で、あるが故に…… 私は海底火山を通じて孤島に赴き、その火山にて噴煙を上げる。その噴煙を雨の核にして、この地に雨をもたらすのだ。

その海底火山の入り口となるのが、この国なのだ」

グライードンはそこまで言って、辛抱しきれなくなったのか、供物に手を付け始める。

「むぐつ…… うん…… それをお前らはな、俺が晴れを呼ぶからなどと言う理由で、雨を降らせない天敵だとか言って、排斥するの

だからな。

さらに言えば、俺がいなくなれば地脈の流れだっておかしくなる。そうなれば、今まで流れていた水脈に水が来なくなり、地下に掘りたてた水路であるカナートやカレーズといった場所にさえも水が来なくなるか、もしくはあふれるのか……それは悪戯な神のみぞ知るところだ。

後悔すると言ったのは……そういう意味だ」

言いきってから、グラードンは再び供物に手をつける。食事の風景は野性味があふれていて神の威厳には乏しく、そこら辺にはびこるバンギラスやボスゴドラと言ったポケモンを巨大化したようにしか見えない。

今度は供物をすべて食べきるまで止まらず、食べきった後で口の周りを拭い、爪についた食べカスまで舐めとってから、大きなげっぷをして再び語りだす。

「この世界の天候は非常に微妙なバランスで司られているのだ。確かに俺がいなくなることプラスに働く可能性も無きにしも非ずだが、それに賭けるのはあまりにも馬鹿げた行為だ。

どうやら俺を追いだした奴らは勇者とたたえられているそうだが、それは飛んだ愚か者どもだな」

フンツと大きく鼻息を鳴らし、グラードンは嘲るように吐き捨てた。そして最後は神らしく厳かな口調で、

「無知とは、積極的に行動する者にとって罪なものだ。人間は最も考える生物故に我らポケモン以上に栄えたのだ。

考えることを忘れた人間は……劣る。この地上のどんな生物よりもな」

最後に、それだけ付け加えて。グラードンは息をついた。

「それで、どうするのだ？ 私を砂漠へ再び呼び寄せるか？」

しばらく考えて、王様は言った。

「そうしようと思う。私は、今まで目先のことばかりに捕われていた。貴方が戻ること、巡り巡ってそれが雨となるならば……グラードンよ、今一度我らの国で大地と日差しを司ってはくれないか？」
グラードンは再びフンツと大きく鼻を鳴らし、尊大な口調で人間へ問いかける。

「俺を敬う覚悟はあるか？」

王様は、首を縦に振る。

「いいだろう。では、雨が降れば俺への供物をささげるがいい。それが条件だ」

言うなり、グラードンはその巨体でゆっくり歩を進める。

「今日のようにうまいものを期待しているぞ」

最後に笑って見せた顔は、取って食われるとでも思うような鋭い牙が並ぶ笑みだったが、人間が自分を理解してくれたことに対する喜びも含まれているようだった。

もしくは、ただ単に美味しいものが食えることに喜んでいるだけかもしれない。

また月日が経って、再びルギアの元へ王様は訪れた。

「なるほど、グラードンを再び呼び戻したか……それでよい。一つのバランスが崩れされば世界は思わぬところから瓦解するものだ……」

眼を瞑りながらしみじみと語っていたルギアは、そこから先を深海のように深い瞳で人間へと問う。

「して、人間よ我らに望むことは決まったか？」

王様は、これまでに話し合った結果出た結論をルギアへと答える。

「私達に種をくれ。乾燥した土地でも強く強く育つ種を」

「よいだろう……確かに砂漠で水分を不足して死ぬことは多いが、食料不足による餓死や衰弱から来る病死も多いものだ。しばし待っている……」

私が条件に見合う植物を運んでこよう。そなたらは、先に故郷へ戻っていくとよい……」

王様たちが頷いて自分たちの国へと帰ろうとするとき、ルギアは銀色の翼をはためかせながら真南へと向かって言った。

「と、この伝説ではルギアは中央アメリカに住んでいると言ったが……みんな、この作物が何か分かるか？ ルギアは南アメリカの中央に向かって行ったんだ。

この答えがわかったら地理の成績で『5』も取るのも夢じゃないぞお」

海老沼先生はそう言って見せたものの、誰も分かるものはいなかった。

「まあ、まだ習っていないところだけに仕方がないか。正解はキサバの実だ。この伝説のポケモンがてんこ盛りかつ喋りっぱなしなお話の真偽は、定かではないが……今でも、巨大なポケモンの糞の跡から、キサバの野生種が生えて来たという報告がある。

それが成分分析の結果、ルギアの糞だという事も考えれば伝説もあながち間違いじゃないんじゃないかと、そういう話だ。

今ではその作物は国での主食の一つだよ」

『主食はうんこから出来た植物かよ』とか、一部の下品な男子が臆面なく、大声でそんなことを口にする。女子たちは『やだ、そう言う事言わないでよ』と返す声がちらほらと。

「こらこら、なんてことを言うんだ？ そんなこと言ったら、夏に美味しい大豆だって女性の尻から生まれたものだぞ。」

それに、ルギアの糞ならきつといい肥料になるだろうが」

半分が笑って、半分が引いていた。まあ、大豆がそんなものだと思うと少々『うえっ』となるのは仕方がない。俺は笑った派だけだよね。

「つまりな……この話で俺が伝えたかったことは風が吹けば桶屋が儲かるとは言うが、グラードンがいなくなると砂漠が滅ぶし、カイオーガに雨を降らせると戦争が起こるんだ。」

このように、人の世は何がプラスになるか、マイナスになるかはわからない……このお話ではルギアがその恐ろしさを指摘しているな？

それはお前らもだ。今の中学生という時期いろいろ経験しておけ。若い頃の苦労は買ってでもしろと言うが、今覚えておいた物事、技能が将来どんな風に役立つかはわからん。

ひよつとすれば、ルギアのように台風を巻き起こすことだってできるかもしれないぞ」

そんなことは流石に無理だろうよ。そう思いながら俺は時計を見る。まだあと五分ほど残っている。

「さあ、残りは時間が許す限り、この昔話に関する地理的な解説をいろいろするからな。寝るなよ？」

海老沼先生はそんなことを言いながら、地理らしい授業を始める。今回のお話に出てきた砂漠の国は海岸砂漠と呼ばれる寒流を起因とする砂漠だとか、気候区分がどうたらとか。

真面目な授業モードになると、やはりほかの教師と同じく面白い授業ではあるが、今日のお話は面白かったし、皆が笑うところを聞き逃したくないから俺は起きてまじめに授業を受けることにする。

もしかしたら、このお話で覚えたことが人生を左右することもあるかもしれないね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9130s/>

風が吹けば桶屋が儲かる？

2011年10月6日14時22分発行